

稱讚 二二二号

二〇二〇年七月二日発行

慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。
浄土の慈悲といふは、念仏して、
いそぎ仏に成りて、大慈大悲心を
もって、おもふがごとく衆生を利益
するをいふべきなり。

「歎異抄」第四条より

本願寺新報』七月二日号の六面七面に
ウイルスで 死ぬのではない
生まれて来たから 死ぬのだ
いまさら 驚くことか・・・
生きて 死ぬ いのちを 生きている
と、大きく掲載されておりました。

その解説には、

右の言葉は、蓮如上人の『御文章』の
「節をもとにしたものです。延徳四年
(一四九二)に疫病が流行し、多くの
人々が亡くなったことを受けて、上人
はこれをお書きになりました。いま現
在、世界中で新型コロナウイルスに感

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚 寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

染して多くの方が亡くなっておられる
こと(こと)を思うと、たいへん厳しい言葉で
す。しかし、蓮如上人は、決して、亡



くなった方やその家族の心情を無視さ
れたわけではなく、また、医療の努力
を無駄なことだとしてこのようなこと
をおっしゃったものではありません。
生まれてきたものは、必ず死んでいく
という、いのちの真実を鋭く指摘され
ているのです。

しかしその真実を受けとめられないの
が私の現実です。そのような私である
ことを見抜き、そのままの姿で救うと
今(こと)ではたらいっておられるのが、
阿弥陀如来という仏さまのお慈悲です
そのような阿弥陀如来の救いに出遇っ
たことを喜び、感謝のお念仏を称えな
がら、生きて死ぬいのちを精いっぱい
生きていく道があります。

と掲載されておりました。

蓮如上人の時代の人びとも、今の時分
にあたりて死去するときは、さもありぬべ
きように 疫癘で死ぬかのように(みなひ
とおもへり。これまことに道理ぞかし。)
御文章)にあるように、病気で死んでし
まうことを恐れていました。その死を免れ
ることが、今も昔も私たちは 救い”と
思っております。その 救い” 聖道の慈
悲)を望んでやまない。

一方、浄土の慈悲では、必ずお浄土に
生まれ、仏と成る身である」と味わえるこ
とが 利益” 救い”と言われていると思
います。素直に頂けない私があります。

二〇二〇 令和二〇年度 稱讚寺永代経法要

去る六月二十八日(廿)に「永代経法要」をおつとめいたしました。
午前十時より、日中法要として、 依説無量寿経」上下二巻を誦読いたしました。
予定では、一時間で読めると思っていました
が、やはり無理でした。



最初は、声高らかに誦読しておりましたが、だんだん口が開かなくなり、唇をあまり動かさず、自分に聞こえるぐらいの声になっていきました。腰もだるくなり、上巻が終ったのは、十一時過ぎでした。十分ほど、休憩をとり、下巻を誦読いたしました。上巻と同じように、最初は声も大きくゆっくりめに読めていたのですが、だんだん疲れてきて、読み間違いも多くなっていきました。
めぐりながら、まだかまだかと思いながら、読み続けて、漸く終ったのが、十二時二十分でした。

入口で、お焼香できるようにセットしておりましたが、どなたもご参拝ではなかったようです。そうしたら、十二時半ごろ、高橋誠哉さんがお出でになりました。
奥さまの八重子さんが午前中お参りする予定でしたが、足を痛められたということで、代わりに参られたとのことでした。

お手製のマスクを持ってきてくださいました。
午後二時から速夜法要をつとめました。早崎光弘さんがご参拝くださいました。

二人で、依説観無量寿経」 依説阿弥陀経」を拝読いたしました。
午前中は誰も居なかったのですが、自分の思うままにとつとめましたが、一緒に拝読するとなると、気を抜けませんでした。

これも一時間の予定でしたが、一時間二十分ぐらい掛かりました。
日頃は、依説無量寿経」 依説観無量寿経」は拝読することはありません。ましてや、完全版を読むことなど、殆どありませんので、



引っかり引っかりになりまして。早崎さんも聴いていて、また引っかったかと思われていたのではないのでしょうか。

浄土三部経」をあらためて、誦読する機会が出来て良かったと思っております。

親鸞聖人が讃岐で、水害に見舞われた方々のために、浄土三部経」を千回読むことを決意されます。途中、それは無意味なことであることに気づかれ、おやめになります。
お経を読む自分の効力で人を救うことが浄土真宗の教え、本願他力の教えではなかったことに気づかれたのです。

また、病で寝込んで居られたとき、夢の中で浄土三部経」の文字が一字一字浮かんできたそうです。ただ、南無阿弥陀仏」のお念仏だけだと思っても、終生、自力の心は捨てられない自分だとも仰っておられます。
今回、浄土三部経」を二回読んだだけで、根を上げた私です。南無阿弥陀仏」のお念仏で良かったと思います。

われ称え われ聞くなれど
南無阿弥陀仏 っれてゆくぞの
親のよび声 原口針水師)

懇志)
佐藤千鶴子様／佐原もとゑ様／川田原末廣様・
正明様／高橋誠哉様・八重子様・早崎光弘様／
外村家様／野口明美様 ありがとうございます

新暦のお盆法要 歓喜会) のご案内

七月十三日 月) ～十五日 水) は、新暦のお盆です。
 稱讚寺では、左記の通り、のんのん法話会にあわせて「歓喜会」としておつとめいたします。
 どうぞ、ご参拝ください。

記

日時 七月十六日 木) 午後二時～
 日程 一四 ●○○ おつとめ
 一四 ●四○ 法話
 一五 ●○○ 恩徳讃

以上

※ご家庭のお盆法要 初盆も含みます) をご予約の方は、ご連絡ください。日程調整のうえ、お参りいたします。また、稱讚寺での法要をお考えの場合も、ご連絡ください。

※旧暦のお盆は、八月十三日 木) ～十五日 土) です。稱讚寺では、十六日 月) のんのん法話会にあわせて、 盂蘭盆会) としておつとめいたします。
 こちらも、新暦のお盆のご案内と同じく、ご家庭のお盆法要をご予定の方は、ご連絡ください。

トピック

コロナシールドとして
段ボールで

パーティションを試作

夏を迎え、コロナウィルスは少し収まってきたかなあと思いきや、東京は六月下旬から感染者が増えだし、七月に入ると百名を超えました。
 三月から六月いっぱい、稱讚寺へのご参拝は皆無とは言えませんが、まばらで、密



になることはありませんでした。

が、これからお盆もお迎えしますし、ご参拝の方が多少増えても大丈夫なようにしようと思いい、参拝席の机や談話室のテーブルに仕切りをすることにしました。

材料は何か良いかと思いい、お店を探しましたが、これというモノが見つかりませんでした。インターネットで既製品を探しましたが、適したサイズもなく、値段もハルので、考えたあげく、段ボールとビニールシートで作ろうと思いい立ちました。

適したサイズの段ボールは注文中でありますので、まずは内にあった段ボールで試験的に作ってみました。

設計図もなく思いいくままに作りましたので、最初は上手く立たず、つぎはぎだらけになりました。写真 左)

二つ目は、強度を考えて、仕切りをつけましたので、少し綺麗に出来ました。

この二つを作るのに、一日かかってしまいました。

七月十日に、段ボールがつく予定です。上手く出来るか乞うご期待？



親鸞聖人御誕生八五〇年

立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

親鸞の生涯とその思想 【二〇七〜二二二】

越後配流から東国布教

流罪による僧籍の剥奪によって

非僧非俗」を宣言する

法然の下に入門して六年、建永二（二二〇七）年、専修念仏停止の命令が調停より下った。この経緯については山崎龍明氏「非僧非俗」と愚禿の名のり」に詳しいが、いわゆる建永の法難（または承元の法難）である。これによって法然は讃岐へ、親鸞は越後へ流罪となった。比叡山で自力修行によって現世に証果を得ようとする（の聖道門を学び、やがて阿弥陀仏の浄土への往生を期する浄土門の世界に出会い、さらに法然との出会いは専修念仏による他力阿弥陀仏の本願に帰す）への思いを決定づけた。その親鸞にとって、門弟四人の斬首と師法然と自信の流罪は大きな衝撃であった。門弟となつて日も浅い親鸞がなぜ流罪になったのかは推測の域を出ないが、法然の信任厚く門弟のなかでも中核的な存在となつていた親鸞を恐れていることといわれている。

流罪によって僧籍をも奪われた親鸞は、もはや私は僧ではない。と、いって単なる俗人ではな

いと、このとき非僧非俗の生き方を選び取る。これは親鸞にとつて転機以上の、のちの親鸞の行動、考え方を捉えるうえで骨格をなすものといえる。「愚禿の鸞」と名のることでもみずからも煩惱から逃れたい悪人と深く目覚めることで、だからこそ阿弥陀仏の本願に帰すれば、自分のような者でも）平等に救済され、身をもって示す生涯へと進んでいくのだ。

越後では妻・恵信尼と家族とともに暮らしていたが、流罪から五年後の建暦元（二二二二）年に赦免されている。親鸞三十九歳、法然七十九歳であった。しかし、その二カ月後に法然は入寂。親鸞が帰京を断念し、越後にとどまったのは、師の入寂の報が大きかったといわれている。

健保二（二二二四）年、親鸞は新たな行動を開始する。越後を出て常陸へ向けて出発したのだ。その経緯は今井雅晴氏の「関東での布教」を参照されたいが、一説には「安城御影」の装束に見て取れるように善光寺の勧進聖として行動したのではないかともいわれている。また、親鸞と同道した妻・恵信尼については西口順子氏「恵信尼の見た親鸞像」と山折哲雄氏「親鸞と恵信」に詳しいが、親鸞にとつて妻・恵信尼の存在がいかに大きなものであったかは、大正十（一九二二）年に発見された十通の「恵信尼消息」によってより鮮明になった。妻帯にとどまらず、女性を不浄視する宗教観と親鸞は無縁であったことが、恵信尼の日常を記した文面から読み取れる。

越後を出て約二十年、親鸞は関東で専修念仏の布教に歩くが、その間、承久三（二二二二）年には承久の乱が勃発。院政というかたちで政

治の実権を握っていた後鳥羽上皇は隠岐に流され、鎌倉幕府が政治の実権を完全に掌握。一方、嘉禄三（二二二七）年には法然の「選撰本願念仏集」が禁書となり、有力門弟三人が流罪、信者は京都から一掃されて専修念仏は大打撃を受けている。その直後に親鸞は常陸で「教行信証」（「顕浄土真実教行証文類」）の執筆を開始。変わりゆく都の様子を耳にししながら、法然の専修念仏の教えを正しく伝えるのは自分に課せられた使命という思いが強まっていたのかもしれない。

非僧非俗と愚禿の名のり

山崎 龍明

越後流罪により親鸞は再生した

念仏弾圧による流罪により、親鸞はすべてを失った。恩師法然を失い、念仏の友を失い、遠い越後に旅立った。いや、罪人として配流されたのである。

しかし、すべてを失ったこの事件によって、親鸞はみごとに復活した。人間として、そして仏教者として。多くを失って、多大なものを獲ることができたのである。思えば比叡山上での、常行三昧堂の堂僧として生きた二十年。挫折して京都・吉水の法然と出会ったのちの六年間。よきひととの出会いのよろこびも越後流罪という現実によって失った。

が、この越後以降、親鸞はそれまでとはまったく異なった、独自の生き方を展開した。越後流罪、関東への移住ということがなかったなら

浄土真宗、親鸞の仏教はこの世に誕生しなかった。その意味では、念仏弾圧事件による流罪という事実は、実に多大な意味をもつこととなった。流罪という事実によって親鸞の腰が据わった。伝統仏教教団と決別し、文字どおり「求道者」として、一人の仏教者として九十歳の生涯をまっとうしたのである。

そもそも念仏弾圧事件とはいかなるものなのであるか。ここでは、親鸞が流罪となった建永の法難（承元の法難）について考えてみたい。

建永元（二〇六）年十二月九日、後鳥羽上皇は熊野に参詣した。その留守中に女房たちが法然門下の安楽たちを御所に呼び入れて、専修念仏の教えを聞いていたという。このことに上皇は怒りをあらわにした。歴史書『愚管抄』のなかで慈円は、御所の女房たちは夜さえ安楽たちをとどめたりすることができた」と記している。貴族側の記録である『聖帝記抄』にはもっと露骨に「念仏にかこつけて、人妻や高貴な人びとの女性と通じた」と記されている。これらの非行に関して後鳥羽上皇が立腹し、翌年、念仏弾圧が敢行されたというのである。

しかし、事実のほどは藪のなかである。念仏者の非行があったのか、また、無実の風聞によって罪科に処せらるゝ蓮如『歎異抄』奥書によれば、かどうかは、定かではない。研究者のなかにも多様な考え方があつた。しかし、その詮索はこの際それほど重要ではない。わたしはいわゆるような非行問題が念仏弾圧事件の契機であったとは考えない。むしろ、法然の専修念仏義つまり、教えそのものにあつたと考える。

念仏弾圧の理由はその教えにあつた

法然の専修念仏義が説く弥陀一仏思想による阿彌陀仏への絶対帰依は、他のいっさいの権威も権力をも無化するものであつた。

法然はその著『選択本願念仏集』において、専修念仏者は戒律、修行、多聞、布施行によつて仏に成るものではないことを示した。この書には専修念仏のことばのとおり、「念仏ひとつ」に生きることの純粹さと尊厳性が示されている。

しかし、それだけにこの書は危険な書であつた。法然みずからがこの書の巻末に「この書を見た者は、すぐに壁の底に埋めて、人びとの前に示してはならない」と記している。専修念仏義は、それまでの仏法とまったく異なつた、すべての人びとを平等に救う普通の法であつた。それは、聖道自力仏教にとつては、危険きわまりないものであつた。念仏弾圧の根本的な理由はこのあたりにあつたと考えられる。

いづれにしても、この弾圧によつて、住蓮、安楽他二名は死罪になり、法然は土佐高知（県）に、親鸞は越後新潟（県）に配流の身となつた。この事実を私は重く考えたい。念仏者のいのちを奪い、死罪であるが、実際に処刑はおこなわれなかつたという説もある。専修念仏集団解散という行為に走らせたものはいつたかなんであつたのか。それこそ政治と一体化した当寺の仏教者、および仏教教団であつたことは疑いを容れないところである。

親鸞は多くの著述をも遺し、ひたすら念仏による救いの道を説きつづけた。しかし自身のこ

とはほとんどいってよいほど述べていない。ここにも親鸞らしさがある。親鸞の教え一筋に生き、周囲から念仏医者といわれた米澤英雄氏は、かつて、「教行信証」こそ親鸞聖人の自伝である」といつた。この書はそのほとんどが經典、論釈の引文からなるものであるが、ところどころに自釈といつて、親鸞自身のことばが記されている。そこには親鸞の肉声がある。

念仏弾圧事件の経緯

念仏弾圧による死罪、流罪事件について、親鸞の貴重な発言がある。裂帛の気魄をもって書かれたその文章は、親鸞の生涯と信心にとつて、ひとつの契機となる重要なものであつた。主著『教行信証』（後序）に示される大切なことばを原文に忠実に訳しておきたい。

こころ静かに考えてみると、古い仏教（聖道門自力仏教）のさまざまな教団は、さとりへの信の学びと、さとりそのものをはるか昔に見失つてしまつてゐる。

これに対して、われわれ専修念仏の教団（浄土の真宗）は真のさとりと、さとりへの道（証道）がいまさかえてゐる。にもかかわらず、古い仏教教団の僧侶たちは、本来の仏教の教えに暗く、なおかつ、人間にとつてなにかが真実であり、なにが偽り（仮）であるか、ということを知らない。

また京都の学者（洛都の儒林）たちも、人間にとつてなにが正しい道かということについて迷つてゐる。したがつて、専修念仏の正しい仏道と、みせかけだけの古い仏教との区

別さえつかないでいる。

このようなわけで、興福寺の学者、僧侶たちは朝廷に奏状、天子に上奏する文書を送った。それは、太上天皇、後鳥羽上皇と今上天皇、土御門天皇)のとき、承元元(二〇七)年二月上旬のことである。天皇と朝廷の貴族たちは法に背き、正しい道理(義)に従わず(違ひ)怒りのこころにまかせて、専修念仏者にうらみ(怨)をいだいてたいへんな危害を加えた。

つまり、専修念仏の教えを人びとに示して盛んにした、法然(源空法師)とその門下に罪があるのかないのか正しく見きわめようとせず、不法にも住蓮、安樂たちを死刑にしてしまったのである。そのうえ、法然や弟子たちから、僧としての身分を奪い、罪人としての名前をつけて、島流し(遠流)にした。わたしもその一人である。

このようなわけだから、もはやわたしは僧侶ではない。しかし、単なる俗人(一般人)でもない(非僧非俗)。したがって「禿」という字を、わたしの姓とすることにした。

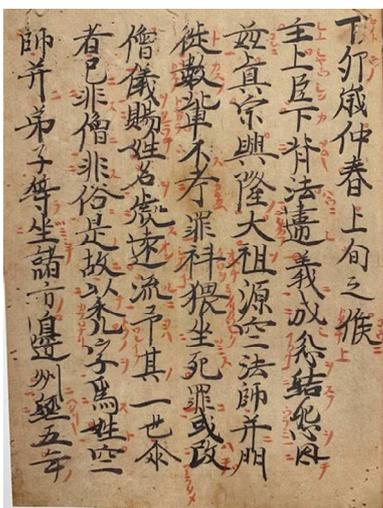
師の法然や弟子のわたしたちは、あちこちの遠い場所に流され、五年の苦しい年月を無実の罪とともに過ごしたのである。

訳文が長くなって恐縮だが、これが『教行信証』に記された親鸞のことばである。いっけん、自伝風の珍しい記述である。

みずからの身辺について記すことのない親鸞が、このようなことばを書き残した。それほど、念仏弾圧事件は、九十年の生涯のなかで

も、忘れることのできない痛恨事であったことが知れる。この文章は原文で読むと実に迫力のある文言であり、是非一度お読みいただきたい。いま、ここに親鸞が座して筆を執っているような、リアリティあふれることばである。

主上(天皇)と臣下が法に背いている



このことばは一般に『教行信証』後序の文といわれてきたが、実に酷しい、親鸞の信仰告白のことばとして私自身は読み、受けとめてきた。さきに訳したとおり、冒頭に「聖道門の諸教は行証久しくすたれ」(聖道自力仏教は、いまの時代では破綻している)といい、洛都の儒林、行に迷いて邪正の道路をわきまうることなし」(都の儒学者たちは正しいおこないとはなにかということについて知らず、専修念仏と古い仏教の違いもわきまえていない)と記されている。

これは、かなり激しい聖道自力仏教と、一般の学者に対する徹底批判である。とくにつぎのことばは親鸞の不当な念仏弾圧に対する忿り、深い忿りの核心をなすものである。

主上臣下、法に背き義に違し、忿りを成し恨みを結ぶ。これによりて、真宗興隆の大祖源空法師ならびに門徒数輩、罪科を考えず、猥りがわしく死罪に坐す。あるいは僧儀を改め姓名を賜って遠流に処す。予はその一つなり。しかればすでに僧にあらざ俗にあらざ。

ここに「姓名を賜って」とあるが、蓮如(四一五〜九九)が書写した『歎異抄』の奥書には「俗名を賜ふ」とある。

緊迫感にあふれたこのことばは、それ自身棄権きわまりないものであった。日本仏教の歴史にあって、これほどまでに正面から天皇と臣下を批判したものがあつただろうか。

主上臣下」の語は親鸞が真実の教えを頭わした經典とされた「大無量寿経」(魏訳)に見られる。そこには、主上あきらかならずして、臣下を任用すれば、臣下自在にして機儀多端なり」(土に立つ者が愚かに下の者を用いると、下の者は、思うままに策をろうして巧みに悪事をおこなう)とある。つまり、ここで念仏弾圧を敢行した主上の不明と、臣下を指弾しているのである。この「主上」という語は第二次世界大戦下にあつては、天皇不敬にあたる語として本願寺教団の学者方が「誹謗を遠慮する語」として、軍部に届け出たもののひとつである。戦後十七年もたった昭和三十七(一九六二)年版の『真宗聖教全書I』に収められる『教行信証』に、この「主上」という語は欠字になっている。当寺学生であつたわたしはおどろき、学者方や教団に不信の念をおぼえたものである。



我が親鸞像

田畑正久氏

基礎があったが故に、求道上の超えられない壁への漠然とした課題を親鸞は抱えられていたのではありません。師との出会いが浄土の真宗への目覚め、大無量寿経の世界へと展開していったのです。これは歴史的な宗教上の大事件であったといえるのではないのでしょうか。

貴賤を問わず身分を越えて、すでに多くの人びとに慕われ、学、徳ともに優れた法然聖人の人格に惹かれながら、若き親鸞は、この人について学ぼう、指導を受けよう、求道して歩もうと意を決して、その後命がけの求道、聞法をされたのです。

私自身、九州大学医学部五年生の時、某新聞のおさそいの欄に掲載された「福岡教育大学仏教研究会の集い」のわずか数行の記事で、仏教の師 細川巖先生、当時化学科の教授との出会いをいただいたのでした。まさに「有ること難し」でした。今では謝しても謝しきれない貴重なご縁であったといわずにはおれません。師を通していただいた仏教の世界、師は決して自分のところに留めず、広い世界へと羽ばたくことを勧めてくれたのです。

師を通して、多くの友が与えられ、歩みを共にしながらの学びは、法然・親鸞によって明らかにされた浄土教の教えに導かれ、残された貴重な著作、そして弟子の文章の学びへと辿り着くのでした。漢文で書かれた著作は解説書なしには私にはまだ読めませんが、まさに群萌のわれわれに、仏の心を伝えようとする苦心されて残された、「和讃」は親しみやすい文章で、本願の心を一段と深く、簡潔に、熱を込めて書き残してくれています。

親鸞が庶民の生活の現場で、生活を共にしながら見、聞き、体験する庶民の生活の実態・窮状、都で経験した貴族、僧侶の現状、時代の変遷の現実、そして親鸞自身の現実人生の状況で、すべての人の救い、浄土の教え、念仏の確かさを確認する日々の歩みを展開されたのです。そして、如来の本願を説き経の宗教とす、すなわち仏の名号をもって経の体

とするなり」と決まされたのです。

医療現場では、ガンになる心配、死の不安、お金がないと治療を中断、などなど生老病死の四苦に絡んだ訴えに頻繁に接します。確かに大変だろう、でも、仏教の智慧があれば・・・、と思われることがしばしばあります。衆生の現状を痛ましく、大悲さされ、智慧といのちを、仏の全てを名前となって届けてあげたいとの本願が思われます。よき師を通していただいた教え、本願の心は、その背後にある諸仏の働きによるものでした。諸仏の背後には親鸞がいらっしゃるのです。そして、それは源を積尊に発するものだと知らされるのです。

世俗の知恵ゆえに「南無阿弥陀仏」と念仏したぐらいでは助かりません、と発現する自称、真宗門徒さん。理性、知性、分別の抱える無明性に、痛ましい」と大悲して、大間に生まれてよかった、生きてきてよかった、という人生を生きる者になって欲しい」との仏の心を伝えずにはおれないと願われる親鸞を、思わずにはいられません。我々は念仏の教えの学びを通して、親鸞の著作をたずねればたずねるほど、その思索の深さ、広さ、大きさに圧倒される思いを強くさせられ、親鸞を「聖人」と仰がざるを得ない、桁外れの偉大さが思われます。しかしその人間性は、我々とは等身大の煩惱を抱えられた存在でもあったのです。そして時代を超えて、まさに一歩前を歩く、人生の身近な先輩のように親しみを感じるようになってくるのです。

田畑正久先生

一九四八年大分県生まれ。医学博士・龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授。西本願寺石の会「発起人。大分県宇佐市の佐藤第二病院院長。一九九〇年頃より、県内中心に「歎異抄を聞く会」を開催。大分県円徳寺の二門徒。

一九四八年大分県生まれ。医学博士・龍谷大学大学院実践真宗学研究科教授。西本願寺石の会「発起人。大分県宇佐市の佐藤第二病院院長。一九九〇年頃より、県内中心に「歎異抄を聞く会」を開催。大分県円徳寺の二門徒。

親鸞の幼い頃の境遇はまさに時代の流れに翻弄されています。しかし、幸いにも学問の道、仏教への道が開かれ、学問の府、比叡山で勉学し、そして求道への真摯な歩みをされたと思われまします。自分を含めてすべての人の救いになる大乘仏教への思い、願いを貫かれ、中途半端な妥協をせず、いわゆる法蔵魂を体とするがごとく、教えをたずね、道を求め、悪戦苦闘をされたのでしよう。それは人類の生死の四苦の課題、生死を超える課題を親鸞の一身に背負われての歩みだったのです。

また師といえる人にも出会えなかったのでしょうか。悪戦苦闘の求道の末に、比叡山での勉学だけでは救い、生死を超える道を得ることができないと苦渋の決断をして山を下りられた。約二十年間の学びは何であったのか、むなししい思いを抱えて、方向性の定まらないまま、わらをもつかむ思いで聖徳太子の六角堂に足を運ばれたのでしょうか。それは遂に、法然聖人との出会いにつながっていかれたのです。

比叡山での学び、苦闘の中から善導の「観経疏」に出会い、仏の心に目覚められた法然、すでに親鸞に先立ちて山を下り、浄土の教え、念仏を説かれていた、当寺智慧第一と評判の高い法然聖人に縁熟して出会うことになったのです。人との出遇いは偶然に出会ったと思われまします、その貴重なご縁は後になって時代性、場所性、状況性を考えると、有ること難しの得がたいご縁」との気づきになるのです。それが人生の方向性を決める決定的なものにならばなおさらのことです。比叡山での大乘仏教の学びの

稱讚寺 行事予定

二〇二〇年 七月の行事予定

※「不要不急」の外出はお避けください。

- 五日(日) 日曜礼拝 九時
門信徒の集い 一四時
- 六日(月) のんのん法話会 一四時
- 二日(日) 日曜礼拝 九時
- 六日(火) のんのん法話会 一四時
歡喜会法要)
- 五日(日) 日曜礼拝 九時
- 二六日(日) 日曜礼拝 九時
親鸞聖人を知ろう 一四時

しんげん

信心

い ちから

生きる力となる

二〇二〇年 心のともしび」七月カレンダーより

二〇二〇年 八月の行事予定

- 二日(日) 日曜礼拝 午前九時
門信徒の集い 午後二時
- 六日(月) のんのん法話会 午後二時
- 九日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 六日(日) のんのん法話会 午後二時
孟蘭盆会法要
- 一三日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 二六日(水) のんのん法話会 午後二時
- 三〇日(日) 日曜礼拝 午前九時
親鸞聖人を知ろう 午後二時

二〇二〇年 九月の行事予定

- 六日(日) 日曜礼拝 午前九時
門信徒の集い 午後二時
- 三日(日) 日曜礼拝 午前九時
- 六日(水) のんのん法話会 午後二時
- 二〇日(日) 秋季彼岸会 午後二時
- 二六日(土) 親鸞聖人を知ろう 午後二時

※毎週日曜日は、日曜礼拝の後、一〇時より「書いて味わう会」(書道)を開催します。どうぞ、ご参拝ください。

編集後記

本願寺新報」七月二日号(九面)には「父さん 母さん 来たよ 早く来てくれたね」のお盆参りを想起する広告が掲載されております。

「瞬、どこの宗派の広告だろうといぶかしく思いました。写真の墓石には、〇〇家とは刻字されてはおらず、南無阿弥陀仏」と刻字されてはありますが、この「コピー文」には違和感を持ちました。

これまでの本願寺の広告で、このような表現をしたことがあっただろうか？

どこぞの仏壇仏具屋さん、葬祭屋さん、石屋さんお他宗の広告では、よく聞く言葉ですが・・・

お寺参り、お墓参りが少なくなった現代の人びとに、古き良き風習(信仰心)を見直して欲しいということ、情緒的に、心情に訴えようとしたのでしょうか？

私には、浄土真宗の「信心がより一層、曖昧になっている。一つの現象ではないか」と思えてなりません。

私の頭が固いのでしょうか？その感性についていけないだけ？

二〇二〇年度 稱讚寺門信徒会費

- 年会費 六千円
- 振込先 城北信用金庫 「ツ家支店」
- 名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会
- 代表 北村 信也
- 口座 普通 6176051